

小品般若經の方便思想

方便という言葉は原始仏典にも散見するが、特に方便が多様な意味に用いられて特有の思想を形成したのは大乘仏教に入ってからである。ここでは初期大乘仏教を代表する『小品般若』にあらわれた方便思想を考察したい。中国における隋唐の学者はインド以来行なわれてきた方便の意義を巧みに整理して、種々の概念にまとめている。淨影寺慧遠の『大乘義章』や『無量寿経義疏』には進趣、権巧、施造、集成の四種の方便を示し、嘉祥大師吉藏の『勝鬘宝窟』には進趣、善巧、善権、施造、離相巧成の五種、慈恩大師窺基の『法華玄贊』には進趣、権巧、施為、集成の四種を示して方便の義を大別している。これらを参考にして『小品般若』の方便の意義をみると五種に分類できると思う。○権巧方便、○施造方便、○化他の方便、○虚仮の方便、○は虚仮の方便を除くどの義にもとれる方便である。これを表にすると次のようになる。

○権巧方便。ここでは真実の世界へ導くでだて、教えの義

目 下 俊 文

権巧方便		施造方便		化他の方便		虚仮の方便		どの義にもとれる方便	
品	回数	品	回数	品	回数	品	回数	品	回数
七	七	初	一	十七	一	十二	二	四	一
十一	四	十七	六	二十一	二	十二	一	十二	一
十四	八	十八	一	二十七	三	一	一	二十五	二
十五	四			二十八	一			二十七	七
十八	七							二十八	五
十九	四								
二十	三								
二十五	二								
計三十九回		計八回		計七回		計三回		計十六回	

であるが、仏や菩薩が迷いの衆生を真実の世界へ導くでだてとしての方便ではなく、主に作仏を目ざしている菩薩の方便である。即ち「自他の救済のためのすべての方法」であるが主として修習者自身についての方法である。これは「有方便菩薩：」「菩薩：無方便故：」「菩薩：方便所護故：」等と用

いられている。この方便は自他の区別なく作仏を願う菩薩が方便に護られているか否か、また方便が有るか否かと説かれている。船喻品十四には、百二十歳の老人が病身にもかかわらず、床を起きて歩こうとする時、二人の健人が老人を支え助ける。老人が行きたいと思う所まで二人が扶けるので道半ばにして倒れることはない。菩薩もまた是のようであるという。即ち、「須菩提よ、菩薩もまた是の如し。阿耨多羅三藐三菩提に於て、信乃至進あり般若波羅蜜と方便の護る所と為すが故に。当に知るべし是の菩薩は中道にて退転せず。よく阿耨多羅三藐三菩提に至る」といい、菩薩は般若波羅蜜と方便に護られて道半ばに退転して目的に達せぬことはない事が示されている。また「菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、当に善く般若波羅蜜と方便を行すべし」等と示されている。ここに挙げた例は般若波羅蜜と方便とであるが、ただ方便の語のみ用いられているところもある。「菩薩は般若波羅蜜を行じ、方便の護る所の故に、第一實際を証せず、阿耨多羅三藐三菩提の善根を成就せんと欲する為の故に、阿耨多羅三藐三菩提を成就する時乃ち第一實際を証す」、また「菩薩は中道にて實際を証さず。何を以ての故に、是の菩薩は方便の所護の故に」と説かれている。ここに用いられている方便は声聞辟支仏の二乗と菩薩との一線を画するものであつて、また大乘菩薩の欠くことのできぬものとして示さ

れている。さらにまた方便のない菩薩は増長慢心を起して余の諸菩薩を輕蔑し、自高することが説かれている。「菩薩は少因縁を以て憍慢心を生ず。当に知るべし、是れ方便あることなしとする。必ず二地に墮す。もしくは声聞地、もしくは辟支仏地なり」と。これらにみられる方便思想は、声聞辟支仏の二地を過ぎ作仏せんとするとき方便はよく仏地へ菩薩を導くのであつて、方便なき菩薩は輕慢の心を起して二地に墮し、この菩薩は声聞辟支仏の証を取り、仏の無上智慧より遠離することが示されている。また菩薩が退転するのは方便力がなく、不退転であるのは方便力を得るからである。このようにこの方便は仏の智慧を得るまでよく護りよく導くのである。菩薩が二地に墮すか、阿耨多羅三藐三菩提を得るかはその有無によることが示されているのである。換言すれば菩薩が二地を取るの方便がないからであつて、菩薩が仏地を得るのは方便によつて得ることができるのである。すなわちこの権巧方便によつて菩薩道が成就されるのであつて、この方便なくしては大乘菩薩道は成就できないといえよう。また回向についても般若波羅蜜と方便を學し、得ることによつて無上正等覺へよく回向されると示されている。

◎施造方便。大乘菩薩が二地を過ぎて、薩婆若、作仏に近づくにしたいが、方便は般若波羅蜜を行ずることと密接に関連して説かれるようになる。すなわち「須菩提、不可説義は

無増無減なり、善く方便を知る菩薩は、般若波羅蜜を修する時、是の念を作さず、檀波羅蜜もしくは増し、もしくは減ずと。是の念を作す、是の檀波羅蜜は但だ名字のみ有り」と。

また「菩薩の方便力は、是の諸相の過を知り、而も無相を取らず」、また「是の心（発心）及び方便力を以ての故に、深く法相を觀するに、もしくは空もしくは無相無作無起無生無所得なり」等といつて、方便力をもつて空無相を觀することが説かれている。また初品に於ては行相を取することは「未だ善く方便を知らず」といい、深功德品第七には「微妙の方便をもつて、色を障へて涅槃を示し、受想行識を障へて涅槃を示す」といつて、ここには不取相、不分別と密接に関連して用いられているのである。

③化他の方便。仏や菩薩が迷いの衆生を導くための方便、いわゆる向下的方便である。『小品般若』に於ては例は少ないが、例せば「人の為に演説し、方便力を成就す」、また「如来の説く所は、無尽無量空無相無作無起無生無所有無染涅槃なり、但だ名字、方便をもつての故に説く」という。これは「是の文字章句相貌をもつて般若波羅蜜を説く」ことを示している。すなわち仏や菩薩が人々を導くために用いる方便である。また「或時説法者のために諸の因縁を作し、好妙の色声香味触を受けしむ。説法者は方便力をもつての故に、是の五欲を受く、汝此の中に於て不淨の心を生ずることなかれ、

応に我方便力を知らずと念言すべし。法師或は衆生を利益し善根を種えしめんが故に、是の法を受用す」といつた化他の方便がみられる。

④虚仮の方便。これは惡魔が用いる方便である。即ち「惡魔また勤めて方便を作し、般若波羅蜜を滅せんと欲すと雖も、諸仏は亦また勤めて方便を作し而して之を守護す」という。また魔事品では単に惡魔の用いる方便がみられるばかりか、惡魔が諸人を偽わる方便もみられる。「須菩提、仏に白して言さく、世尊、惡魔は云何が方便を動作して、人をして般若波羅蜜を誹誹修習することを得ごらしむや。須菩提、惡魔は諸人を誹誹して是の言を作す。此は眞の般若波羅蜜に非ず、我有する所の經、是れ眞の般若波羅蜜なりと。須菩提、惡魔は是の如く衆人を誹誹するなり」と。ここで惡魔が諸人を偽わる方便がみられることは注意すべきである。

⑤いずれの義にもとれる方便。これは「菩薩の方便力は皆般若波羅蜜より生ず」、「諸仏は亦また方便を動作して而して之を守護す」、また「是の人当に我が為に般若波羅蜜と方便力を説くべし」と説かれて、施造、化他等の方便に分類できないものである。

詳細は西山學報28号「方便思想の展開」(一)参照

(西山短期大学講師)